
銀河転生伝説 外伝

使徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河転生伝説 外伝

【Nコード】

N2427T

【作者名】

使徒

【あらすじ】

銀河転生伝説の外伝です。

本編の主人公ハプスブルク公が活躍(?)している頃、自由惑星同盟に転生したもう一人の転生者の話や、本編では語られなかった秘話を投稿していきます。この小説は、らいとすたっフルール2004にしたがって作成されています。(本編 <http://ncode.syosetu.com/n4886s/>)

(続編 <http://ncode.syosetu.com/n5653w/>)

年表……というかななるメモ

宇宙歴 / 帝国歴

775 / 466

アドルフ・フォン・ハプスブルク誕生

792 / 483

第五次イゼルローン要塞攻防戦

アドルフ17歳

794 / 485

ヴァンフリート星域会戦

第六次イゼルローン要塞攻防戦

アドルフ19歳

795 / 486

第三次ティアマト星域会戦

第一子妊娠発覚

第四次ティアマト星域会戦

長女グレーティア誕生(母リーシャ)

アドルフ20歳

796 / 487

アスターテ星域会戦

カストロプ動乱

第七次イゼルローン要塞攻防戦

第二子妊娠発覚

アマリッツア前哨戦

アマリッツア星域会戦

アドルフ21歳

797 / 488

次女ブリギッテ誕生(母ミーナ)

アルテナ星域会戦

ドーリア星域会戦

キフォイザー星域会戦
ガイエスブルク要塞攻防戦
ヴァルハラ星域会戦

アドルフ22歳

798/489

第八次イゼルローン要塞攻防戦開始

フェザーン制圧

アドルフ23歳

799/490

第八次イゼルローン要塞攻防戦終結

ランテマリオ星域会戦

バーミリオン星域会戦

自由惑星同盟滅亡

アドルフ皇帝に即位

エリザベート懐妊

サビーネ懐妊

地球教あぼ〜ん

アドルフ24歳

800/491

長男カルロス誕生(母エリザベート)

二男ゲオルグ誕生(母サビーネ)

三女カロリーネ誕生(母リーシャ)

アドルフ25歳

801/492

三男アレクサンデル誕生(母ヒルダ)

四女シモーネ誕生(母ミーナ)

アドルフ26歳

803/494

四男ユリウス誕生(母アロマ)

ウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッ

ツ元帥退役

グスタフ・フォン・ナトルプ元帥退役
アドルフ28歳

804 / 495

ドーバー回廊発見
アドルフ29歳

805 / 496

レンスプルト星域会戦
ロアキアとの戦争開始
第二次レンスプルト星域会戦
ドーバー要塞建造開始
第二次ガイエスブルク要塞攻防戦
アドルフ30歳

806 / 497

五女ミリア誕生(母サビーネ)
マリウセア星域会戦
ルシタール星域会戦
アドルフ31歳

結論：リア充氏ね！

人物設定……的なもの

<アドルフ・フォン・ハプスブルク>

本作の主人公。転生者。

転生者が何人も存在してきた家系ハプスブルク公爵家の嫡男として生まれ、後に公爵から皇帝へと大出世する。

色々と残念な人物だが、普段の言動ほど無能というわけではなく、実質的な能力はそれなりにはある。

「新たな星々」では皇帝という立場上容易に戦場に出張って来るわけにもいかず、話の最後にちよっぴり出番を設けられたりする。

<リーシャ>

ハプスブルク家に仕えるアドルフ専属のメイドで、後に彼の側室の1人となる。

裏設定では、ブラウンシュヴァイク公カリッテンハイム侯の手の人形でメイドとして潜入してアドルフを暗殺しようとしたところ阻止され、捕えられて処刑されそうになるが、アドルフに助命されたことで心服。

が、作者にそこらへんの描写を書く力量が無かったので没となった。

<ミーナ>

リーシャ同様ハプスブルク家に仕えるアドルフ専属のメイドであり、後に彼の側室に。

初期設定には存在すらしていなかったが、『アドルフが手を出すメイドが1人で済むはずがない』ということで出演が決定した。

<アルト・スプレイン>

くある自由惑星同盟転生者の話くにおける主人公的存在。転生者。真面目な人物であり、同盟の敗北を阻止しようと奔走するが結局無駄に終わってしまう可哀想な人物。能力的にはアドルフより上。

<マリナ・フォン・ハプスブルク>

アドルフの妹。天才。毒舌。

銀河帝国軍艦艇

標準戦艦

同型艦：オストファアーレン、ネルトリンゲン（魔改造）、タンホイザー、ヴァルトブルク、他多数

標準高速戦艦

同型艦：シュワルツ・ティーゲル、テューリンゲン、ヤークト・パンター、他多数

ヴィルヘルミナ級戦艦

同型艦：ヴィルヘルミナ、ベルリン、オストマルク、フェルゼン、ラーテ、ヴィルヘルム、ヴィクトリア、ピョートル、カルロス、クイン・エリザベス、キング・ジョージ、マリア・テレジア、カイザー・カール

ブリュンヒルト級戦艦

同型艦：ブリュンヒルト、ブリュンヒルデ

バルバロッサ級戦艦

同型艦：バルバロッサ、レヴィアタン、ポセイドン、スペリオル、ノーチラス、ヴェスヴィオ、オリュンポス

ベイオウルフ級戦艦

同型艦：ベイオウルフ、トリスタン、イゾルデ、グロース・ドイツ
チェラント

ケーニヒス・ティーゲル級戦艦

同型艦：ケーニヒス・ティーゲル、キング・ティーゲル、ロイヤル・
ティーゲル、パンター・ティーゲル、グラン・ティーゲル

フォルセテイ級戦艦

同型艦：フォルセテイ、スキルニル、サラマンドル

アラスカ級超巡航艦

同型艦：アラスカ、グアム、ハワイ、フィリピンズ、プエルトリコ、
サモア、クヴァシル、ブリュッヒャー、ローン、ヨルク、ネーデル
ラント、ユトレヒト、アムステルダム

ヨーツンハイム級戦艦

同型艦：ヨーツンハイム、ガルガ・ファルムル

アースグリム級戦艦

同型艦：アースグリム、アハトアハト、ドイッチェラント、リュッ
ツォー、アドミラル・シエーア、アドミラル・グラーフ・シュペー、
スルクフ、マツシマ、ハシダテ、イツクシマ

フォンケル級戦艦

同型艦：フォンケル、ヨルムンガンド、スターリン

ヴイーザル級戦艦

同型艦：ヴイーザル

リユーベック級戦艦

同型艦：リユーベック

パーツィバル級戦艦

同型艦：パーツィバル、フリードリヒ・デア・グロッセ

ニユルンベルク級戦艦

同型艦：ニユルンベルク

エイストラ級戦艦

同型艦：エイストラ、ウールヴルーン

グラーフ・ツェツペリン級宇宙母艦

同型艦：グラーフ・ツェツペリン、ペーター・シュトラッサー、ウ
エーゼル、ポメラニア、ケルンテン、スラボニア、シロンクス

ドーラ級砲艦

同型艦：ドーラ、グスタフ

ゲルマン砲（自走砲？）

同型艦：20門ぐらい生産

その後、順調に昇進を重ね現在の階級は大佐。

現在、第六次イゼルローン要塞攻防戦の前哨戦が行われており、俺はワイトル少将率いる分艦隊（1500隻）の参謀として戦場に立っている。

丁度、小賢しい敵　ラインハルトではない　を他の3個分艦隊と連携して半包囲下に追い込んだところだ。

「よし、敵を半包囲したぞ。こちらは敵の2倍、このまま叩き潰してくれ！」

ワイトル少将は歓喜の声を上げる。

あの小賢しい敵を討ち取れば昇進もあるかもしれないという打算もあるのだろう。

が、敵は紡錘陣形をとり、隣のユースタス分艦隊へと突入する。

やられた！！

こちらの兵力は敵の2倍とはいえ4つに分散しており、各艦隊1500。

3000対1500では、その圧力に屈するのは当然の帰結だ。

俺の想像通り、敵艦隊はユースタス分艦隊を蹴散らし半包囲陣を突破した。

だが、このまま黙って逃がすわけにはいかない。

「閣下、追撃しましょう。確かあの方向にはミツチエル少将率いる3000隻の分艦隊がいるはずです。上手くいけば挟撃できるかもしれない」

「う、うむ。全艦、敵を追撃せよ」

.....

結果的に、追撃は無駄に終わった。

敵はミツチエル分艦隊に遭遇後、猛烈な勢いで攻め立て、ミツチエル少将が艦隊を立て直すため一旦後退した隙にあっさり引いて逃げられたのだという。

その話を聞いて、原作では語られて無かったが、あのような実力者もいたんだなと改めて思わされた。

それとも、あの分艦隊の指揮官は原作キャラの誰かだったのか？

うーん、わからん。

* * *

いよいよ、第六次イゼルローン要塞攻防戦が始まる。

俺の所属するワイトル分艦隊は、前哨戦が終了しての再編の結果2000隻に増強された。

つまり、あの『小賢しい敵』の突撃でユースタス少将が戦死し、残存艦艇を他の分艦隊で三等分したということだ。

この第六次イゼルローン要塞攻防戦は、同盟軍は帝国軍と互角に渡り合うもののラインハルト一人に翻弄され、結局トールハンマーをくらって敗北する。

原作を読む限り、同盟軍に行動は最後のラインハルト艦隊へと追撃を除いて特に問題ないように思える。

ならば、俺のすべきことは最後のトールハンマーによる被害をどれだけ減らすことができるかだ。

もつとも一太佐に過ぎない俺が影響力を及ぼせるのは、このワイトル分艦隊の中だけ。

せめてこの艦隊だけでも無事に救いたいものだ。
主に俺の命の為に。

・・・

これまでに、俺が聞いた報告をまとめると以下のようなになる。

- 1 ・ホーランドの奇襲部隊が撃破され、総司令部が襲撃される。
- 2 ・帝国軍部隊が突出し出し、同盟軍が予備兵力を投入し混戦状態へ。
- 3 ・ローゼンリッターが帝国艦を次々に襲撃。
- 4 ・消耗戦に陥る。
- 5 ・ホーランドが柔軟で機動性を極めた艦隊運動で活躍。
- 6 ・同盟軍で撤退の意見が主流になる。
- 7 ・イゼルローン要塞を出撃した2000隻ほどの艦隊が同盟軍の後背に出て退路を断つ動きをみせる。
- 8 ・同盟軍、2000隻の艦隊を30000隻で追撃。

報告を聞く限り、第六次イゼルローン要塞攻防戦は原作と同様の展開のようだな。

このままだと危ない！

「撃て撃て、あの小艦隊を逃すな！」

「閣下、ダメです。後退しましょう」

「何故だ？」

「たった2000隻を30000隻で無秩序に追いかけるのは無意味です。それに、見てくださいイゼルローン要塞を」

「ん・・・なっ!!!」

「このままではトールハンマーの射程内に引き込まれます」

「しかし、この流れでは後退など・・・」

「艦隊の針路を斜め左にとり、この流れから徐々に抜け出すのです。そして・・・」

「トールハンマーが!!」

「やばい、閣下・・・ダメだ硬直している。なら俺が」

「全部隊、回廊の天頂方向に急速上昇！天井に張り付けー！」

「直後、トールハンマーが放たれた。」

「光が同盟軍の艦艇を呑み込んでいく。」

「よし、この艦隊は無事だ。」

「他の艦隊は・・・酷いことになっているな。」

「第二射きます！」

「総司令部より退却命令」

「閣下」

「あ、ああ。全艦退却！」

12月10日17時40分 第六次イゼルローン要塞攻防戦は自由惑星同盟軍の全面退却をもって収束した。

同盟軍の戦死者は75万4900名。
帝国軍のそれは36万8800名。

同盟軍はイゼルローン要塞攻略という戦略上の目標を達し得ず、損害においても敵を大きく上回った。
トールハンマーが発動するまでは互角に戦ったという戦術レベルでの自己満足のみが残り、それと引き換えに一都市の人口に等しい人命が失われたのである。

.....

「スプレイン大佐、君のおかげで我が分艦隊はトールハンマーによる犠牲は出なかった。君には感謝している」

「ワイトル閣下.....」

「どうかね？今夜は一杯」

「良いですね。お付き合いさせていただきます」

この銀河系には千億の星が存在し、千億の光を放っている。
アルト・スプレイン大佐　彼が同盟にどんな光をもたらすのか、
それはまだ誰にも分からない。

第2話 ティアマトの戦い

第六次イゼルローン要塞攻防戦での功績により准将に昇進。
第十二艦隊所属の参謀となり、旗艦ペルーンへ乗艦する。

帝国と同盟の戦争は今まで概ね原作通りに進んでいたが、この第三次ティアマト会戦で原作からの乖離が出た。

両軍の投入戦力が原作より1個艦隊ずつ多いのだ。

そのため、本来なら第三次ティアマト会戦に参加するはずの無い第十二艦隊が第五、第十、第十一艦隊と共に迎撃艦隊として戦場にある。

それはさて置き、原作通りホーランドが芸術的艦隊運動（笑）を始めた。

ホーランドはバカだが、その艦隊運動だけは見事だ。
分艦隊司令としてならばホーランドは優秀な部類に入るのだろう。
だが、そこが^{ホーランド}あいつの限界。

所詮1個艦隊を率いる器では無かったということか。

「ボロディン提督、第十一艦隊のあの艦隊運動がいつまでも続くわけがありません。それに、帝国の一部の艦隊が戦わずして後退しています。混乱の渦中から身を引き、逆撃の機会を狙っていると考えられます」

「逃亡でも潰走でもなく後退か・・・これは危ないな」

「では、大事になる前に引かせた方がよろしいのではないでしょう

か？」

それは無理だよコナリー少将。

「そうだな。一応、進言はしてみるか。第十一艦隊に『戦果は十分、深追いせず後退しろ』と打電してくれ」

「第十一艦隊は素直に引いてくれるでしょうか？」

「ふむ・・・難しいかな」

「ホーランド提督の性格を考えれば無理でしょう。ホーランド提督は自身をブルース・アッシュビー提督の再来と言っているそうです。確かに、中將になったのは同じ32歳ですが・・・」

「第十一艦隊より返信、『前方に敵影少なし。今は直進して敵を分断、完全に撃滅せん』以上」

ま、こつなるだろうな。

「ん、これはちょっと・・・どうしようもないな」

「では閣下、第十一艦隊がやられた場合の対策をとっておきませんか」と

「うむ、第五艦隊と第十艦隊に通信を繋げ」

「ハッ、直ちに」

画面に第五艦隊のビュコック提督と第十艦隊のウランフ提督が映し

出される。

『ボロディン提督、どうかしたかの？』

「残念ながら、第十一艦隊の敗退は時間の問題でしょう」

『貴官もそう見るか』

「ええ、このままでは我々も道連れにされかねませんからな。それに、第十一艦隊の他の将兵の犠牲も最低限で済ませねばならぬでしょう。そのためには我々が連携して帝国軍の攻撃を凌ぐしかありません。すみ」

『道理ですな。では、敵の反撃に備えとしましょう』

こちらの完敗は避けられそうだな。

.....

遂に、その時は来た。

暴風の如き破壊力で戦局をリードし続けていた第十一艦隊は攻勢の終末に達し、拡大から収束へと向かう一瞬にその動きを止めてしま

う。

つまり、行動の限界点に達したわけだ。

そして、それが解けようとした刹那　まるで待ち構えていたかの如く、混乱の渦中から身を引いていた敵の2個艦隊の斉射をくらった。

「だ、第十一艦隊旗艦工ピメテウス撃沈!!」

一瞬にして指揮官を失った第十一艦隊は烏合の衆でしかなく、壊滅の危機にある。

それにしても、ホーランドがバカやって第十一艦隊がボコられるのは原作通りだが、なんでラインハルト以外に見切ってるやつがいるんだ？

「敵軍、全面攻勢に出てきます！」

「第五、第十艦隊と連携して敵の攻撃を凌ぐ。撃て！」

帝国軍は隊形を崩し、一旦立ち竦むように足を止めたが、再び前進してこちらを追い詰めにかかる。

だが、こちらの3個艦隊が巧妙に連携し、第十一艦隊の残存兵力を庇いながら後退する。

「閣下、敵の先端部をピンポイントで潰していきましょう。敵の勢いを削ぐのです」

「なるほど、名案だな。全艦、敵の先端部に砲火を集中せよ。敵を近づけさせるな」

敵は数度に渡り突進してきたが、さすがはビュコック、ウランフ、ポロディンと同盟でも一流の指揮官たちだ。

この3人は敵が突進してくる度、柔軟で崩れを見せない防御網で食い止め、致命的な損傷を受けぬまま敵の追撃を断念させた。

・・・

同盟軍は艦列を立て直し、本国へと帰還中だ。

第十一艦隊は完全に敗残の列で、再建の苦勞が思いやられる。

ホーランドは本来なら二階級特進で元帥になるところだが、処罰と相殺ということになるだろう。

つまり、戦死によって処罰を免れたわけだ。

命あつてのモノダネと言うが、どちらが本人にとって幸せなのやら。

「ホーランドも英雄に成り損ねたな」

「英雄ですか・・・そう言えば私の同期で英雄について面白いことを言ったやつがいます」

「ほう」

「『英雄など酒場に行けばいくらでもいる。その反対に歯医者の治療台には一人もいない。ま、その程度のものだろう』と」

「ふっ、なるほど。反論の余地は無さそうだな」

そう言つて笑うボロディン提督。

今回の戦いは終わったが、また新しい戦いが始まるだろう。

ハイネセンに着いたら、それまではのんびりと過ごしたいものだ。

* * *

宇宙歴795年 / 帝国歴486年

同盟軍4個艦隊50000隻はイゼルローン要塞へ向け発進した。対する帝国軍も4個艦隊55000隻でイゼルローン要塞より出撃する。

両軍はティアマト星域で対峙し、第四次ティアマト会戦が幕を開けた。

開始早々、敵左翼のラインハルト艦隊が前進し出すが、中央も右翼も呼応せず結果としてラインハルト艦隊だけが突出する形となった。

このままでは同盟軍に袋叩きに会うのは目に見えている。だが、ラインハルト艦隊は前進を止めようとしない。

「敵の左翼艦隊、更に前進してきます。距離、16000」

「ふむ、これは……」

「何かの罠ではないでしょうか？」

ラインハルト艦隊の無謀としか考えられない前進行動に誰もが戸惑いを隠しきれない。

そして、ロボス元帥が左翼艦隊攻撃の命令を下そうとした、その時
ラインハルト艦隊は突如針路を左に転換し、戦場を横切る形で横断し出した。

このラインハルトの戦場横断を同盟軍は畏と勘違いし攻撃の好機を逃すばかりか、側面への展開までも許してしまう。

やばい、このままだと原作と同じく同盟軍は全滅の危機に瀕する。

「ボロディン提督、これは畏ではありません。至急、攻撃しましょう」

「ん、確かにここでチャンスのみすみす見逃すのもあれだな。よし、全艦攻撃開始！」

第十二艦隊はラインハルト艦隊に砲撃を加えるが、ラインハルト艦隊は既に過半まで横断していたため攻撃は中途半端なものとなつてしまい、撃沈することができたのは2000隻程度にとどまった。

ラインハルト艦隊は戦場を横断し、味方左翼の側面に付く。

く、これは・・・原作通り消耗戦になるな。

・・・

自由惑星同盟軍旗艦アイアースの作戦室に各艦隊の司令官と参謀たちが集まっている。

「我方の損害18651艦、死者228万。艦数はともかく、死者の数は敵を下回っています」

「問題は生存者の数では無く戦える戦艦の数だ」

「艦船の消耗も現在我方が有利です。しかし、敵軍には無傷の艦

隊がいます」

横断中に第十二艦隊の砲撃で2000隻程度の損害は与えているが・
・・・。

「もし、あの艦隊が攻撃を開始したら我が軍の全滅は避けられませ
ん」

「何故あの艦隊が我らの目前を横断したときに第十二艦隊以外、誰
も攻撃しなかったのだ！」

「・・・・」

ロボス元帥の問いに誰も答えられない。

あのと、ほとんどの人間が同じ考えを思い浮かべていたはずだ。

『これは罠ではないか』

と。

「敵左翼艦隊、突入してきます」

遂に、ラインハルト艦隊が突撃を開始し出した。

「もはや、一刻の猶予もありません」

「策があるのか？」

「少数の艦で敵の裏側へ出て敵要塞を攻撃せんと見せかけ、その隙
に本隊は撤退します」

「ふむ、陽動作戦か。だが、要塞に向かった者はおそらく二度と帰ってはこれんだろう。誰がその任務を引き受けてくれるのか」

会議室は沈黙に包まれる。

「私がやらせていただきますしょう」

「ん？」

「お前は、ヤン・ウエンリー准将」

ヤンは、小さく頷いた。

・・・

陽動作戦が成功し、混乱しつつある帝国軍に同盟軍は苛烈な砲火を加える。

これによって敵中央は大きく崩れかけているが、敵右翼部隊は堅固な守りを見せ中々しぶとい。

装甲の厚い戦艦を並べて防御壁を築き、その内側から小型艦で砲撃を加えてくる。

これは後にヤンが使う戦法だが・・・。

第三次ティアマトの時といい、敵の　それも1個艦隊を指揮できる立場に優秀な人物がいるようだな。

ラインハルト一党だけでも手に負えないのに・・・勘弁してくれよ。

「敵軍、総攻撃を仕掛けてきます！」

陽動作戦だと気づいた帝国軍は、逆に総攻撃をかけてくる。

元々数で上回る帝国軍の大攻勢をこちらは支えきれない。

同盟軍の艦が次々に爆沈していく。

この第十二艦隊とウランフ中将の第十艦隊の奮闘でどうにか戦線を維持しているものの、他の艦隊は崩壊寸前だ。

おまけに、敵は艦隊を上下左右に伸ばして半包囲態勢を構築しつつある。

勝敗は決した・・・かに見えた。

そのとき、1隻の同盟軍の戦艦がラインハルトの乗るブリュンヒルトの真下に張り付いた。

ヤン・ウェンリーの乗るユリシーズだ。

「あれは、陽動作戦を買って出た・・・名は、何と言ったかな？」

「ヤン・ウェンリー准将です。小官とは士官学校で同期でした」

「ほう」

「彼はエルファシルの英雄としても有名です」

「なるほど、エルファシルの奇跡はフロックでは無かったということ」

とか」

ラインハルトを人質にとられた帝国軍は攻撃中止し、同盟軍は退却を開始する。

友軍が退却したのを見届けると、ユリシーズも戦場を離脱。

ここに、第四次ティアマト会戦は終結した。

* * *

俺は、戦場を横断中のラインハルト艦隊への攻撃を進言したことが評価され、少将への昇進が内定した。

昇進自体は嬉しいが、この後起こるであろうアスターテや帝国領侵犯のことを思うと胃が痛くなる。

どうにか原作の悲劇を回避できないものか……。

それと、第三次ティアマトと今回の第四次ティアマトで活躍したあの敵、旗艦がヴィルヘルミナ級の戦艦だったことから、おそらく同一人物だろう。

原作には居なかった強敵……。

もしかしたら俺と同じように転生者なのか？

だとすれば、そいつの目的は何だ？

・・・結論の出ないことを考えていても仕方がないか。
今は、俺にできることをやろう。

これは星屑のように光る英雄たちの中の、小さな星たちの始まりに
過ぎない。
英雄たちの戦いは、ここに始まる。

第3話 愁雨来たりなば…

第三次、第四次ティアマト会戦での功績が評価された俺は、少将に昇進して第十二艦隊の分艦隊2500隻の指揮官を拝命した。

旗艦はマサソイト。

原作の後半でアッテンボローが旗艦にしていたヒューベリオンの準同艦。

部隊の指揮どころか艦長経験すらない俺だが、ボロディン提督の推薦などもあって分艦隊司令という地位になったわけだ。

なんでも、『お前なら2500隻程度十分に指揮出来るだろう』とのこと。

正直過大評価だとは思っただが、任されたからにはしっかりやる必要があるだろう。

・・・そんなこんなで訓練に励んでいるうちに、アスターテ会戦、第七次イゼルローン要塞攻防戦が起こり、結果もほとんど原作と同様だった。

ただ、第七次イゼルローン要塞攻防戦では要塞駐留艦隊が突っ込まずに撤退したらしい。

いったい何が起きているのか・・・俺一人のイレギュラーだけでここまで原作との乖離が出るとは到底考えられない。

転生者が俺だけ・・・と考えるのはある意味傲慢だろう。

帝国側に転生者がいる・・・特に怪しいのが第三、第四次ティアマト会戦で活躍していた帝国の艦隊司令官ハプスブルク大将だろう。

ハプスブルク公爵家なんて原作では聞いたことも無い。

単に出て来なかっただけ・・・とも考えられるが、彼または彼の祖先に転生者がいるのは間違いないだろう。

もしくは、転生者の影響を何らかの形で受けているか。

だが、話はそう簡単なことでも無い。

転生者といっても、原作知識というアドバンテージがあるだけで、どこぞの小説のようにチート能力があったりするわけじゃない。これは俺自身が実感したことだ。

しかも、原作知識も人であれば当然、時と共に忘れていく。

俺が原作を覚えているのは、覚えている内容を出来る限りメモし、それを見ながら時折思い出すようにしているからだ。

なので細かいところはもう色々と忘れていく。

原作知識を有効に活用し、自身で艦隊の指揮もこなす・・・ただの凡人にできることじゃない。

俺にしても、ここまで（分艦隊司令官に）来るのにどれだけ苦労したことがか。

・・・ここで考えていても真実は分からんな。

この話はいったん置いておこう。

当面の課題は、帝国領侵攻を如何にして止めるかだ。

それが無理なら、どれだけ被害を減らせるか。

俺は前世でも今世でも民主共和制の国で生きてきた人間だ。出来ることなら、それをこのまま続けたい……。

* * *

帝国領侵攻が決定。

俺も少ないコネを使って色々働きかけたけど無理だった。

いつそ思い切ってフォークを暗殺しておけば良かったか……。いや、どちらにしろ帝国領への侵攻が同盟市民の大半の意思である限り出兵は避けられなかつただろう。

原作で、第十二艦隊はルッツ艦隊と交戦し全滅する。

つまり、このままだと分艦隊司令である俺も高確率で戦死してしまう。

もつとも、これは各星系の占領に艦隊を割いていたことや食料の不足による士気の低下という要因もあるため、それらを少しでも改善できれば結果はまた違ってくるはずである。

そして今、俺の属する第十二艦隊はボルソルン星域へ到達し、各地を占領下に置いている。

やはり、食料物資が引き揚げられてるな……。

「ボロディン提督、このままでは敵の焦土作戦に乗せられます。占領地を最小限に……いえ、この際ゼロにして敵襲に備え、撤退準備をしておきましょう」

『・・・そうだな。だが、司令部への説明はどうする?』

「虚偽の報告を送ってしまえば良いかと。この戦い、我々の敗北は必至です。であれば、如何に多くの兵を生きて帰せるかが重要となるでしょう。この戦い後、罷免されるであろう司令部への虚偽報告など些細な問題です」

『ふむ、貴官の言う通りだな。我々はこれより各地の占領を放棄、撤退準備を整える』

・・・

そして、遂にその時は来る。

帝国軍の反撃が開始されたのだ。

「敵影確認。数、15000」

「攻撃開始!」

あれは戦艦スキルルニルだな。

やはり、ルッツ艦隊か。

幸い、こちらは各地の占領を放棄していたため、まだ余力はある。

今のところ、戦況は互角だ。

だが、時間が経てば数と士気の差からこちらはジリ貧になるだろう。

どうするべきか・・・。

『全艦突撃、これより攻勢に出る。敵が艦隊をいったん引いたら、全速力でイゼルローンまで撤退する』

なるほど、攻勢を仕掛けて敵をいったん下がらせ、その隙に脱出するというわけか。

「よし、突撃だ！ 敵が下がったらこちらも引くぞ！」

「はっ」

こちらの攻勢によって艦列を乱されたルッツ艦隊は、艦隊の再編を図るためいったん後退する。

『今だ！』

「よし、撤退せよ」

この第十二艦隊の行動に、ルッツは慌てて追撃を命じる。

「敵、追撃してきます！」

「構うな！ 全速で撤退だ」

* * *

第十二艦隊はルッツ艦隊を振り切り、恒星アムリツツアへ到達した。その戦力は戦闘前の7割ほどに減っていた。

恒星アマリツアに終結したのは、連戦したはずなのに何故か1割の損害しか出ていない第十三艦隊、3割を失いつつも撤退に成功した第五、第八、第十二艦隊、司令官と艦隊の半数を失った第九、第十艦隊、司令官を失い辛うじて全滅を免れた第三艦隊。第七艦隊は原作通り全滅（降伏）したようだ。

計55000隻。

出兵時の約半分まで減っている。

各艦隊の再編を行った結果、各艦隊13000、計52000隻で帝国軍を迎え撃つこととなった。

損傷が酷く戦闘に耐えられない艦はイゼルローンへ帰したため、数は3000隻程減ってしまったが。

布陣は、左から第十二、第五、第八、第十三艦隊の順だ。

原作よりは多少マシな陣容だが・・・さて。

それと、気になることがある。

ヤン中将がドヴェルグ星域で遭遇したのはキルヒアイスではなく、ハプスブルク上級大将という人物らしい。

「いったい、どういうこと『ピー、ピー』」

敵艦隊接近のアラームが鳴る。

「やれやれ、考え事をする暇も無いか。」

アマリツアへ現れた帝国軍は8個艦隊10万隻。

こちらのおよそ2倍の数だ。

これに背後からの奇襲部隊が加わるんだから、この戦いでこの敗北は既に確定していると言って良いだろう。

『全艦、砲撃開始!』

アマリッツア星域会戦が開始される。

「提督、恒星アマリッツアに融合弾を投下し、恒星風に乗って敵を奇襲してはどうでしょうか?」

『なるほど、面白い戦法だ。試してみる価値はありそうだな』

第十二艦隊は、恒星アマリッツアへ融合弾を投下することで人為的に恒星風を起こし、恒星風による加速を得てロイエンタール艦隊を攻撃した。

この攻撃により、ロイエンタール艦隊の艦列が乱れ、混乱が生じる。

その頃、奇襲を受けたロイエンタールは、

「ほう、このような方法で奇襲とは・・・敵も出来るな。いったん後退して陣形を再編、敵が引いたところを反撃せよ」

と、生じた混乱を冷静に対処していた。

この辺り、さすが名将といったところである。

『深追いは無用だ。敵の反撃が来る前に引け』

敵はロイエンタール。

ポロディン中将の言うように、すぐに反撃してくるだろう。

「よし、これで十分だ。元の位置まで後退せよ」

そんな中、黒一色に塗装された艦隊が第十三艦隊に突っ込んで行く。
ビッテンフェルトのシュワルツ・ランツェンレーター黒色槍騎兵だ。

シュワルツ・ランツェンレーター黒色槍騎兵は第十三艦隊に避された後、第八艦隊に突っ込み旗艦クリシュナを撃沈する。

「第八艦隊クリシュナ撃沈、アップルトン中将も戦死の模様」

「第八艦隊は崩壊しつつあります。このままでは我が軍は分断されますぞ」

「援護したいところだが、この状況では無理だ」

第十二艦隊は第八艦隊から離れている上、ロイエンタール、ケンプの両艦隊から攻撃を受けており、援護など不可能だ。

その間、ビッテンフェルト艦隊は第十三艦隊を撃つべく回頭するが、それを読んでいたヤンに強かに打ち据えられる。

依然、戦況はこちらが不利であるが、現在は膠着状態となっている。しかし、それは帝国軍が援軍の到着を待って無理をしていないからだ。

向こうがその気になれば勝負はすぐに決まるだろう。

原作だと、もうすぐキルヒアイス、ワーレン、ルッツ艦隊が背後を

突く。

だが、ワーレンのサラマンドル、ルッツのスキルニルは前方の敵軍の中にある。

そしてメックリンガー艦隊がない。

どういうことだ？

「背後に新たな敵艦隊出現！数・・・お、およそ50000！！」

「なに！？」

50000隻だと！

確か原作では30000隻だったはずだ。
多すぎる！！

「敵中央に真紅の戦艦を確認。ヤン艦隊より報告のあったハプスブルク上級大将率いる艦隊と思われます」

敵の別動隊が砲撃を浴びせてくる。

だが、正面の敵で手一杯の同盟軍はそれに対応することができない。

「オレーグ被弾！」

「リユーリク自走不能！」

「ロ口轟沈！」

「戦艦パルテノン、戦艦イスタンプール撃沈！ カスパー提督、イワンコフ提督戦死！」

俺の元には絶望的な報告が引っ切り無しに入ってくる。

こころなしに、背後の艦隊が攻撃のリソースをこの第十二艦隊に多く割いているような気がするが……。

「戦艦コーカサス撃沈、副司令官ワイトル少将戦死！」

「ワイトル少将が……」

ワイトル少将は俺が大佐の時……第六次イゼルローン要塞攻防戦で俺の上司だった人物だ。

実力は中の上ぐらいだったが、良い人だった……。

これで、第十二艦隊の分艦隊司令官で生き残ってるのは俺だけか。

「旗艦ペルーン撃沈！ ボ、ボロディン提督……戦死！」

ボロディン提督　。

「……指揮権を引き継ぐ。装甲の厚い戦艦を外側に、火力と装甲の弱い艦を内側にして敵の攻撃に堪えながら……撤退せよ！」

第五艦隊、第十三艦隊も艦を撃ち減らされながらも撤退の態勢に入っている。

損害はこちらほどでは無さそうなのが唯一の救いだ。

……

逃げる同盟軍と十数万の大兵力で追う帝国軍。

一度でも止まれば、あの大艦隊に包囲殲滅させるだろう。

ヤン中将から殿を引き受けると通信があった。

原作では上手く切り抜けることが出来たが、あのハプスブルク上級大将とやらが転生者なら、ビットンフェルト艦隊の薄さに何らかの手を打っているはずだ。

そうなら第十三艦隊は……。

ここは原作通りに行くことを祈ろう。
俺に出来るのはそれだけだ。

* * *

結果的に、ヤンは疑似突出を使って撤退に成功した。
それは、ビットンフェルト艦隊を突破することが不可能だとヤンが判断したことを意味する。

これで、ハプスブルク公爵 Ⅱ 転生者 は確定だ。

公爵ということは門閥貴族。

彼は、この後のリップシュタット戦役でラインハルトに付くのか、それとも……。

いずれにせよ、もっと帝国内の情報を集めなければならない。
戦死したポロディン提督の為に……。

第4話 原作知識が役に立つとは限らない

同盟は帝国領侵攻作戦において大敗を喫し、2000万人の将兵を失った。

行きは10万隻を超えた戦闘艦艇は、イゼルローン要塞に戻った時にはその4分の1に満たなかった（先に戻った3000隻の損傷艦艇除く）。

俺の所属する第十二艦隊も、ハイネセンへ戻れたのは僅か2000隻。

司令官のボロディン中将も戦死し、分艦隊司令官の中でも生き残ったのは俺だけだ。

……落ち込んでいてもしょうがない、この先のことを考えよう。

帝国では、この後リップシュタット戦役が起きる。

アドルフ・フォン・ハプスブルクというイレギュラーが居るから結果がどうなるかは不明だが、内乱の勃発は間違い無いだろう。

そして、捕虜交換と同盟での救国軍事会議の連中によるクーデターも。

クーデターによる被害はただでさえ弱っている同盟に止めを刺してしまう。

何としても阻止しなければならない。

しかし、どうすれば……。

* * *

結論を言うと、クーデターは阻止できなかった。

トリューニヒト議長やネグロポンティ国防委員長、ビュコック司令長官にそれとなく伝えてはいたが、すべて無駄に終わった。

グリーンヒル大将たちが首謀者なのは分かっているけど、それは俺に原作知識があるからであって、証拠が無ければ何もできない。

せめて、フォークによるクブルスリー統合作戦本部長殺害未遂事件でも防げればよかったんだが、その時は麾下にある部隊3000隻の訓練を命じられていてハイネセンにいなかったためどうにも出来ず、クーデター発生後は各地の救国軍事会議勢力の鎮圧に当たっていた。

原作知識があってもこんなにも役に立たないとは……。

結局、クーデターは原作通りに終結。

俺は、救国軍事会議によるクーデターを見抜いた先見性と反乱軍の鎮圧の功績で中将に昇進し、第十二艦隊の再建を命じられた。

副司令官はアラルコン少将。

信条的あるいは性格的に問題のある人物だが軍事的にはそこそこの有能であるため、まあ良しとする。

第十二艦隊の再建を始めたようとしたところで、信じられない報告が入ってきた。

帝国での内乱はアドルフ・フォン・ハプスブルク大公が勝利者となり、ラインハルトがヴァルハラ星域での決戦で戦死したという報告だ。

これで、原作は完全にブレイクした。
先はもう読めない。

……いや、なんとなく分かる。

帝国の転生者は原作通り同盟へと侵攻してくるだろう。
圧倒的な戦力差で。

* * *

『諸君、私は女の子が好きだ。 諸君、私は女の子が好きだ。 諸君、
私は女の子が好きだ。』

義姉が好きだ。 義妹が好きだ。 義母が好きだ。 義娘が好きだ。 双子
が好きだ。 未亡人が好きだ。 先輩が好きだ。 後輩が好きだ。 同級生
が好きだ。 教師が好きだ。 幼なじみが好きだ。 お嬢様が好きだ。 金
髪が好きだ。 黒髪が好きだ。 茶髪が好きだ。 銀髪が好きだ。 ロング
ヘアが好きだ。 セミロングが好きだ。 ショートヘアが好きだ。 ボブ
縦ロールストレートが好きだ。 ツインテールが好きだ。 ポニーテ
ールが好きだ。 お下げが好きだ。 三つ編みが好きだ。 二つ縛りが好き
だ。 ウエーブが好きだ。 くせっ毛が好きだ。 アホ毛が好きだ。 セ
ラーが好きだ。 ブレザーが好きだ。 体操服が好きだ。 柔道着が好き
だ。 弓道着が好きだ。 保母さんが好きだ。 看護婦さんが好きだ。 メ
イドさんが好きだ。 婦警さんが好きだ。 巫女さんが好きだ。 シスタ
ーさんが好きだ。 軍人さんが好きだ。 秘書さんが好きだ。 ロリが好
きだ。 ショタは嫌いだ。 ツンデレが好きだ。 チアガールが好きだ。
スチュウワースが好きだ。 ウェイトレスが好きだ。 白ゴスが好きだ。
黒ゴスが好きだ。 チャイナドレスが好きだ。 病弱アルビノが好きだ。
電波系が好きだ。 妄想癖が好きだ。 二重人格が好きだ。 女王様が好

きだ。お姫様が好きだ。ニーソックスが好きだ。ガーターベルトが好きだ。男装の麗人が好きだ。メガネが好きだ。目隠しが好きだ。眼帯が好きだ。包帯が好きだ。スクール水着が好きだ。ワンピース水着が好きだ。ビキニ水着が好きだ。スリングショット水着が好きだ。バカ水着が好きだ。人外が好きだ。幽霊が好きだ。獣耳娘が好きだ。

家で、街中で、学校で、宮廷で、艦中で、要塞で、戦場で、空中で

この世のありとあらゆる萌えが好きだ。二次元が、エロゲが大好きだ。

ツンデレな娘が好意を隠してツンに振る舞うのが好きだ。

ヤンデレな娘に包丁を突き付けられ空中でバラバラにされるのは結構怖い。

巨乳な娘の胸で挟まれるのが好きだ。

ロリッ娘の頭を撫でるのは気持ちがいい。

主人公とヒロインの日常を見るのが好きだ。

BAD ENDになるのは悲しいものだ。

キャラの新しい一面を垣間見た時は感動の極みだ。

ヒロインを落としてエンディングに辿り着いた時など絶頂すら覚える。

すべてのヒロインを攻略した達成感などはもつたまらない。

隠しキャラが出現するのも最高だ。

攻略キャラと信じていたのがただのサブキャラであった時は屈辱の極みだ。

……自由惑星同盟で規制がさらに強化された。

特に、18禁ものはすべて販売停止である。

萌えが淘汰されようとしているのだ、それも『自由』を冠する者た

ちによつて。

諸君らはこれを認められるか？ これを許せるか？

そう、否だ！ 私はそれを認めない、許さない！

……それで、諸君らは何を望む？』

「ジハード 聖戦！ ジハード 聖戦！ ジハード 性戦！」「」「」「」

『よろしい、ならば戦争だ！

我々は渾身の力をこめて今まさに放たれんとする魔法少女の魔導砲だ。

だが何年もの間規制に堪え続けてきた我々にただの戦争ではもはや足りない！！

ジハード 大聖戦を！！

一心不乱のジハード大性戦を！！

我らは200個艦隊4千万の大軍だ（陸戦隊含む）。だが諸君は一騎当千のfull強者だと私は信仰している。ならば我らは諸君と私で総力400億と0.3人の軍集団となる。

萌えを忘却の彼方へと追いやり眠りこけている連中を叩き起こそう。髪の毛をつかんで引きずり降りし眼を開けさせBDで見せて思い出させよう。

連中に萌えとは何なのかを思い出させてやる。
連中にエロゲの良さを思い出させてやる。

天と地の狭間には奴らの哲学では思いもよらない萌えがあることを思い出させてやる。

400億人の同志の戦闘団で、ガンブゲルッペ世界を萌えで覆い尽くしてやる。

萌えの良さも分からぬ愚かな同盟軍の艦隊を空中でバラバラにしてやる！

ハプスブルク大公アドルフより全艦隊へ。目標、自由惑星同盟首都星ハイネセン！！

ゼーレーヴェ
アシカ作戦を開始せよ！ 征くぞ諸君、萌えを銀河に！！』

……… な・ん・だ・こ・れ・は！？

意味不明にも程があるぞ！
そんな理由で攻めてくんないよ！

空中でバラバラとか何なの？

バカなの？

死ぬの？

て言うか0・3つて何だよ！

お前の戦闘力1人分にすら及ばねえじゃねえか！！

しかも艦隊の数何気に20まで増えてるし。

これはさすがに多すぎだ！！

……… はあゝ、頭が痛くなってきた。

第5話 ランテマリオ星域の会戦

あの巫山戯^{ふびけ}た演説から約2週間後、イゼルローンに帝国の侵攻部隊が押し寄せてきた。

ナトルプ上級大将を総司令官とした帝国軍はおよそ55000隻。要塞に駐留する第十三艦隊15000の4倍近い数だ。

イゼルローン要塞の攻略において動員した艦艇数で過去最大なのは第五次イゼルローン攻防戦における同盟軍の50000隻だが、その記録は今回更新されることになる。

しかし、俺はこれが陽動にすぎないということを確信している。間違い無く、帝国軍はフェザーン方面より大挙して押し寄せてくるだろう。

そして、それを止める手立ては無い。

帝国には今イゼルローンに侵攻している部隊を除いてもまだ20万隻以上の戦力が有るが、同盟は第十三艦隊を除けばパエツタ中将の第一艦隊13000隻に俺の第十二艦隊12000隻、それとビュコック司令長官直属の5000隻。全て合わせても30000隻しかない。

無理やり掻き集めればさらに20000隻ぐらゐは集まるかもしれんが……。

それでも帝国軍の4分の1にも満たない。

* * *

宇宙歴799年1月1日、帝国軍によるフェザーン占領の報が入り、俺を含む各艦隊司令官は統合作戦本部に集められた。

第十二艦隊司令官の俺に、第一艦隊司令官パエッタ中将、新規に編成された第十四艦隊司令官モートン中将、第十五艦隊司令官カールセン中将。

まさかこの面子の中に俺が加わる日が来ようとは……。

ドーソン元帥への挨拶を済ませた後、俺たちは会議室で作戦会議を始めた。

「この際、正面から決戦を挑むのではなく、ゲリラ戦に終始して敵の補給路を叩いてはどうでしょうか？」

「うむ、その言は正しい。じゃが……」

「敵はガイエスブルグ要塞に推進装置を付け、移動拠点として使用しているようです。要塞だけで全ての補給を賄うのは難しいかもしれませんが、そのままハイネセンを突ける程度の余裕があると考えられます」

敵はあのガイエスブルクを補給基地として使っているのか……。上手いやり方だ。

おそらく、敵の総数は20万を超えるだろう。

ガイエスブルクだけでそれだけの補給を賄えるとは思えないが、艦艇数に余裕がある分補給船団の護衛は厚くなるだろう。

それに、こちらも50000隻もの数でゲリラ戦をするのはさすがに無理があるから襲撃部隊を1個艦隊程度まで減らさざるを得ない。だがそうすると敵の護衛部隊に阻まれる……か。ゲリラ戦は無理そうだな。

* * *

宇宙歴799年/帝国歴490年2月7日12時40分、帝国軍の位置に関する情報がこちらにもたらされた。

帝国軍の総数は10万隻を超え、9個艦隊が縦列に展開しつつ第二惑星の軌道をかすめる形でランテマリオ星域を通過しようとしているらしい。

これは……罨だな。

おそらく敵の陣形は原作同様『双頭の蛇』だろう。

同盟軍も帝国軍も原作より数が多い。

それがこの後にどう影響してくるのか……。

ビュコック司令長官から中央突破の命令が入る。

ここから見た感じ、敵の中央部は思いの外厚い。突破出来るだろうか？

「み、味方の一部が砲撃を開始しています！」

……やっぱりこうなったか。
なんとなく予想はしていた。

だが、これはどうしようもない。

混成艦隊の上、あれだけの大軍を敵に回した経験のある者はアムリ
ツツア経験者ぐらいのものだろう。

ビュコック元帥は……このまま中央突破を図るようだな。
少々早まってしまったが、これも予定の内だ。

「砲撃開始！ 敵の中央に風穴を開けてやれ」

同盟軍は敵中央に果敢な攻撃を繰り返すが、帝国軍の堅実な守りも
あつて突き崩せずにいる。

敵中央部隊はハプスブルク元帥の直属艦隊とミュラー、シュタイン
メッツ、メックリンガー艦隊か。

特に、守勢に強いミュラー艦隊は厄介だな。

「敵、両翼が動きます！」

来たか……。

敵両翼の先頭はよりもよって双壁だ。

「司令部より伝令、『左ノ艦隊二集中砲火』とのことです」

なるほど、タイムラグを利用して各個に撃破するわけか。
さすがはビュコック元帥だな。

「左の艦隊に一斉掃射、てえー！」

多数のビームとミサイルを叩きつけられたミッターマイヤー艦隊はその足を止める。

「次は、右の艦隊だ。砲撃開始！」

敵左翼のロイエンタール艦隊も先程のミッターマイヤー艦隊同様の結果になった。

急場は凌げたか。

だが、次はタイミングを合わせて来るだろう。後退するなら今だな。

幸い、敵にはビッテンフェルトがない。

このまま第一惑星の軌道上まで後退してヤン艦隊が来援に来るのを待てば……

「後方に敵の別動隊が回り込もうとしています！ 数、50000隻以上！」

背後だと、バカな！

それにこの数は……。

「後方が遮断されました！」

帝国軍の両翼が真っ直ぐ延びてこちらの左右に展開する。

「我が軍、敵の包囲下にある」

「くっ、密集して敵に備えろ」

これは…マズイ。

突破しようにもこの数の差では……。

「戦艦マルドゥーク撃沈、アラルコン副司令官戦死！」

「グラックス提督にアラルコン部隊の穴を埋めさせる。これ以上撃ち減らされるな！」

おそらくヤン艦隊がこちらに向かっているはずだ。それまで粘れば！

「敵の予備兵力と思われる艦隊が動き出しました！」

ここまでか……

「ん？ これは！」

「どうした？」

「第十三艦隊です！ 第十三艦隊が来援に来ました！」

間に合ったか。

「敵、混乱しています」

「今がチャンスだ！ 敵の薄い部分に砲撃を集中しろ！」

包囲網に穴が空く。

「よし、突入せよ！」

.....

同盟軍は間一髪で危機を脱した。

だが、まだ戦いが終わったわけじゃない。

次のバーミリオンでハプスブルク大公を倒せば勝機はある。

.....いや、まだ戦いがバーミリオンで起こると決まったわけじゃない。

この世界は、既に原作から離れているのだから.....。

第6話 バーミリオン星域会戦

宇宙歴799年/帝国歴490年4月13日、バーミリオン星域に帝国軍が侵入しつつある。

バーミリオン星域会戦の始まりだ。

ランテマリオ星域での会戦を終えて、ハイネセンに帰還した後、俺とモートン中将、カールセン中将の3名はヤン元帥の指揮下に加わった。

第十三艦隊を除いた同盟軍の残存戦力は24000隻。

ランテマリオでは帝国軍によって半分以下に打ち減らされた。

これを8000隻ずつ3個艦隊に分け、俺たち3人の中将が指揮する。

帝国軍は、原作と同じく各艦隊が各地に散って同盟軍の基地を叩いているようだ。

原作のラインハルトと同じ手を採るのか？

いや、ヤン元帥の実力は転生者であるハプスブルク大公も知っているはず。

だとすれば……原作同様に考えない方がいいな。

それに、原作との大きな違いもある。

ライガール星域会戦、トリプラ星域会戦、タツシリ星域会戦が行われていないのだ。

そのせいか、本来なら4月24日に始まるはずであるバーミリオン星域会戦は今日4月13日に始まるうとしている。

……いや、今更そんなことを考えても詮無き事か。
今は戦いに集中しよう。

バーミリオン星域に侵入してくる帝国軍の艦艇数は約62000隻。対するこちらは、伏兵となっているカールセン艦隊8000隻を除いた31000隻。
およそ2倍の戦力差だ。

なるほど、圧倒的な兵力差で粉碎する。
これが奴の策か。

確かに、原作ではヤン元帥が戦力で圧倒的に上回る敵を相手に勝利を収めたことは無い。

アスターテは引き分けに持ち込むのが限界だったし、ドヴェルグでは4倍の敵を相手に持ち堪えただけであり、アムリツアは勇戦したとはいえ敗北。

バーミリオンはミユラー艦隊が参戦したのはラインハルトの敗北が決定的になってからだし、包囲されたラインハルト麾下の部隊を救おうとして大損害を被っていることを考えると論外。

伏兵の第十五艦隊を含めたとしてもまだ20000隻以上の戦力差があることを考慮すれば、確かにこれは妥当な策だ。

だが、それでも俺たちは勝つ。
そのための第十五艦隊だ。

「敵、射程内に入りました」

「司令部より攻撃命令」

「よし、全艦砲撃開始！ 敵を殲滅しろ！」

ここが橋頭保だ。

カールセン提督率いる第十五艦隊が敵の背後に回り込むまで、なんとしても戦線を維持する。

・・・

あれから3日が過ぎた。

そろそろ第十五艦隊が到着する頃だな。

「敵後方に第十五艦隊、第十五艦隊が到着しました！」

「よし、挟撃のチャンスだ。撃って撃って撃ちまくれ！」

第十五艦隊との挟撃状態にあるのは中央の第十三艦隊で、右翼の俺の艦隊と左翼の第十四艦隊は今までと変わらない。

だが、俺とモートン提督が攻勢をかけることでメックリンガー、シユティンメッツ艦隊が援護に回らぬよう足止めしておくことは出来る。

第十三艦隊と第十五艦隊が敵中央を潰すまで足止めすればこちらの勝ちだ！

「敵中央、攻勢を強めます！」

凄まじい勢いだ。

如何にヤン元帥といえどもあの勢いを抑えるのは……。

ん、中央を空けた？

わざと突破させて損害を減らすつもりだろうか？

ハプスブルク艦隊、ミユラー艦隊が抜けて、メックリンガー、シュ
タインメッツ艦隊も抜けようとする。

「司令部より伝令、『敵の集結地点に砲火を集中せよ。なるべく正
確に、効率的に』とのことですよ」

そうか、敵の集結地点を狙うのか。

「よし、撃て！」

* * *

その後、帝国軍は再編のため一時距離を取り、こちらもその間に艦
隊の再編を行った。

俺の艦隊が中央へ、第十五艦隊が右翼へ配置された。

第十四、第十五艦隊が敵両翼に攻勢を仕掛けて敵中央と分断し、俺
の艦隊と第十三艦隊が敵中央を攻撃する。

ミユラー艦隊の突破にかなり梃子摺ったが、数の優勢もあってどう
にか突破できた。

「前方にハプスブルク艦隊。数、18000！」

こちらは第十三艦隊と合わせて17000隻。
これだけやっても、まだ数の上で劣勢だ。
いい加減嫌になってくる。

「敵が奇妙な動きをしつつあります」

何だ？

何をしようとしている？

「司令部より伝令、『敵が空けた空間の直線上の部隊を少なくし、
急速回避の準備を怠るな』とのことです」

「うむ、あの直線上の部隊に回避準備を命じておけ」

「はっ」

ヤン元帥は何かを感じ取ったらしいな。
ここは言われた通りにしておこう。

「エネルギー波、来ます！」

直後、敵中から6本のビームが発射された。
要塞砲にすら匹敵する規模だ。

ん、あれはアースグリム級か。

なるほど、あれはアースグリム級の艦首大型ビーム砲だったわけだ
な。

これが敵の切り札か。
だが、こちらの損害は軽微。
このまま敵を突き崩す。

「敵の策は潰えた！ このまま一気に押し込め！」

火力の集中とフィッシャー提督の適切な艦隊運動でハプスブルク艦隊の戦力を削いでいく。

「敵軍、後退します」

「今が好機だ。ここでハプスブルク大公を討ち取るんだ！」

敵の艦艇はみるみる減衰していき、敵の旗艦も被弾し出している。

あと一息、あと一息だ！

「う、右方に多数の艦影。急速に接近してきます！」

「あ、あれは……敵の別動隊です！」

「中央に戦艦アースグリムを確認！」

何！？

ファーレンハイト艦隊だと！？

いくらなんでも早過ぎる！

「第十四艦隊、挟撃されます！」

メックリンガー艦隊とファーレンハイト艦隊に挟撃された第十四艦隊はみるみる内に数を減らしていく。

「戦艦アキレウス撃沈、モートン提督戦死！」

「後方に敵艦隊出現、数8000！」

あれは……アイゼナツ八艦隊か。

これほど早く2個艦隊が駆け付けるとは……。
どうやらこれが敵の真の切り札だったようだ。

「メックリンガー艦隊がこちらへ向かってきます！」

モートン提督が戦死したことで、第十四艦隊は組織的な行動が取れなくなっている。

ファーレンハイト艦隊だけで十分だと判断したのだろう。

「戦艦ディオメデス撃沈、カールセン提督戦死」

程なくして、第十五艦隊の旗艦ディオメデスも撃沈された。

「シュタインメッツ艦隊がこちらへ接近中」

「我が軍は包囲されつつあります！」

「敵の攻撃激しく、戦線を維持できません！」

「艦列、崩れます！」

次々と入る絶望的な報告。

それらは全て、同盟軍の劣勢を示していた。

「敵中央に砲撃を集中しろ！ ハプスブルク大公さえ撃てば！」

そう言いながらも、もう無理だと何処かで諦めている俺が居る。

「こ、後方に多数の艦影！ 敵の新手です！」

「詰んだか……ここまでだな」

勝敗は決した。

ここに至って、もはや逆転の目は無い。

後はヤン元帥の停戦命令を待つばかりだ。

力及ばず……だな。

* * *

その後、同盟は帝国に併合され宇宙から消滅。

ハプスブルク大公も皇帝に即位してアドルフ1世となり、勅命によつて地球教も殲滅された。

ヤン元帥、ビュコック元帥は退役し、俺やチエン参謀長、アッテンボロー、グエン・バン・ヒューは帝国軍に編入されて帝国軍人となっている。

結局、俺は何も変えることが出来なかった。

……確かに、俺の介入によっていくらか原作から乖離した。
だけど、それは川の流れを少し変えた程度のこと、同盟の滅亡と
いう行き着く先は変わらなかった。

歴史を大幅に変えたアドルフ皇帝とは大違いだな。

まあ、それもまたよし……か。

第1話 妹は天才？

宇宙歴802年 / 帝国歴493年。

銀河を統一し、発展の極みにある銀河帝国であったが、何の問題も無いというわけではなかった。

リップシュタット戦役終了後、アドルフが権力を握ってから平民たちの地位は以前より高まりつつあったが、自由惑星同盟を併合したことによりその流れはより大きくなりつつあった。

そうならば、それを快く思わない者も出てくるのは必然と言えるだろう。

結果、そういった者の一人であるリンド伯爵が反乱を起こした。

その反乱の鎮圧に、ある提督が任命された。
名をマリナ・フォン・ハプスブルク。

銀河帝国38代皇帝アドルフ1世の実の妹であった。

* * *

<マリナ>

私の名は、マリナ・フォン・ハプスブルク。

歳は22歳。

銀河帝国ハプスブルク大公家の長女よ。

ま、私が生まれた時はまだ公爵家だったけどね。

兄貴は、銀河帝国38代皇帝アドルフ1世。

あの兄貴が皇帝って……プツ
流石にこれは無いわw

だってあの兄貴よ！

部屋で前世がどうたらこうたら一人で呟いてるあの兄貴よ！
エロゲのサイト見ながら『発売延期！？……orz』てやってるあの兄貴よ！

最初に聞いた時は何かの間違いかと思ったもの。
世も末よね。

……

つい先日、何をとち狂ったのかリンド伯とか言う門閥貴族の一人が
反乱を起こした。

今更反乱を起こしたところで結果がどうなるか分からないのかしら？
だとしたら兄貴以上のバカよね。

ま、そんな訳で私が5000隻の艦艇を率いて討伐に向かってるっ
てわけ。

私の階級？

中将よ。

旗艦は戦艦ブリュンヒルデ。

前に兄貴が宇宙艦隊の総旗艦として乗ってた艦だけど、私が（強引に）譲り受けた。

同盟が滅びて銀河が帝国によって統一された今、港に係留されてるだけだしね。

なら、私が有効利用してあげないと。

美しい白亜の艦。

故ラインハルト元帥が同型艦のブリュンヒルトを愛した理由が分かるわ。

ほんと、兄貴には勿体無い艦だったわよね。

兄貴のやつ、この艦を痛艦に改造してたのよ、信じられない！

あんまりムカついたからボコツてやったわ！

この艦を私にくれたときの、あのニヤニヤした笑いを堪える顔ときたら……。

思い出すだけで腹が立つわね。

帰ったらもう一度ボコツてやりましょうか。

それと、今のこの艦の艦長はメデューサ・フォン・ライドウルク中佐。

なんか兄貴が『ライダー萌え〜。おっ持ち帰り〜！』とか言って連れ去ろうとしてたけど、優秀な人だからなんとか阻止したわ。

私の一撃で兄貴の腕が有り得ない方向に曲がってた気がするけど…

…気のせいよね。

私は何も見なかったわ。

「ハプスブルク中将、敵艦隊を発見しました。数、3000」

3000隻って……たったそれだけで反乱起こして成功すると思っ

たわけ？

帝国の宇宙艦隊は20万隻以上いるのよ。

バカなの？

脳ミソ腐ってるの？

何で生きてるの？

兄貴の劣化版？

それとも、兄貴の（脳の）病気がうつった？

私にだけはうつさないでほしいわね。

まあ、どうでもいいわ。

何にせよ、汚物は早く消毒しないとね。

「全艦攻撃開始。敵は数でこちらに劣っているわ、蹴散らしなさい！」

こちらの砲撃に堪えかねて敵は後退する。

数においてこちらが勝ってるから当然と言えば当然なだけだね。

あゝあ、手応えの無い消化試合になりそうだね。

「こ、後方に敵！ 数5000。これは……」

「ふーん、さすがに一人で反乱を起こすほど無謀じゃ無かったということね……どちらにせよ結果は変わらないけど。まあいいわ、前の敵を突破した後改めて蹴散らしてあげる。全艦、紡錘陣形をとって敵の中央を突破よ！」

私の艦隊は敵中央を突破した後、陣形を再編する。

その間に、敵は増援と合流した。

これで、敵は約7500。

対する私の艦隊は5000弱。

「兵力差は多少こちらが不利だけど……あの程度なら問題無さそうね」

「は？」

「敵の連携は円滑とは言い難いわ。そこを突いて切り崩すとしましよう」

思った通り、敵は連携が上手くいってない。

最初こそ一応連携が取れていたものの、中々優勢にならない戦況に我慢できなくなったのか、徐々に乱れてきている。

「今よ、敵の両翼を砕きましょう。ゲルマン砲発射！」

ハプスブルク領から密かに（勝手に）持ち出したゲルマン砲2門。

持ってきておいて良かったわ。

残った敵中央も集中砲火を浴びてのた打ち回っていて、もはや集団として機能していない。

その上、逃亡艦もでている。

これで戦局は決したわね。

「敵軍、戦線崩壊の様様」

「当然ね。そうなるように動いたもの」

「敵旗艦オートマルク、及びクレインレンツ、パルメロンの撃沈を確認」

「そう、ならこれ以上の戦闘は無用ね。降伏勧告を出しなさい」

リンド伯爵、カビッツ子爵、ポルド子爵の首謀者3名を失ったことにより、反乱は収束。

彼らの所有していた領地は没収され、直轄領へと編入された。

マリナ・フォン・ハプスブルクは、この反乱鎮圧の功績により大將へ昇進。

約8000隻の艦隊を任せられることになった。

銀河帝国皇帝アドルフ1世の妹マリナ・フォン・ハプスブルク。
彼女は（兄と違って）天才であった。

人物設定……的なもの

<アドルフ・フォン・ハプスブルク>

本作の主人公。転生者。

転生者が何人も存在してきた家系ハプスブルク公爵家の嫡男として生まれ、後に公爵から皇帝へと大出世する。

色々と残念な人物だが、普段の言動ほど無能というわけではなく、実質的な能力はそれなりにはある。

「新たな星々」では皇帝という立場上容易に戦場に出張って来るわけにもいかず、話の最後にちよっぴり出番を設けられたりする。

<リーシャ>

ハプスブルク家に仕えるアドルフ専属のメイドで、後に彼の側室の1人となる。

裏設定では、ブラウンシュヴァイク公カリッテンハイム侯の手の人形でメイドとして潜入してアドルフを暗殺しようとしたところ阻止され、捕えられて処刑されそうになるが、アドルフに助命されたことで心服。

が、作者にそこらへんの描写を書く力量が無かったので没となった。

<ミーナ>

リーシャ同様ハプスブルク家に仕えるアドルフ専属のメイドであり、後に彼の側室に。

初期設定には存在すらしていなかったが、『アドルフが手を出すメイドが1人で済むはずがない』ということで出演が決定した。

<アルト・スプレイン>

くある自由惑星同盟転生者の話くにおける主人公的存在。転生者。真面目な人物であり、同盟の敗北を阻止しようと奔走するが結局無駄に終わってしまう可哀想な人物。能力的にはアドルフより上。

<マリナ・フォン・ハプスブルク>

アドルフの妹。天才。毒舌。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2427t/>

銀河転生伝説 外伝

2011年11月10日06時11分発行